

国指定重要無形民俗文化財

阿月神明祭

◇由来

阿月神明祭は『左義長』と言う宮中の行事が民間に伝えられた俗称「とんど」と、神明信仰の習合した神明祭に、小早川家の軍神祭が習合した祭事といわれています。

旧阿月領主の祖浦宗勝とその子景継は小早川隆景に従って文禄元年(一五九二)朝鮮半島へ出陣の折、伊勢神宮へ祈願をして大勝を得た事により以後小早川家の軍神祭として執り行なわれることになりました。

その後、正保元年(一六四四)浦就昌が阿月に移封され阿月の東西両地区の砂浜二か所に、天照皇大神宮(東神明宮)並びに豊受大神宮(西神明宮)を奉祀しました。この時より神明祭は始まったとされています。この祭りは、松・竹・椎・裏白・梅・橙・皇大神宮

の大麻(御札並びに扇等を以って、天照皇大神をまつる御神体を作ることからはじまります。この御神体を阿月では神明或いは神明様と言って、浦氏の時代から今日まで連綿と守り継がれています。

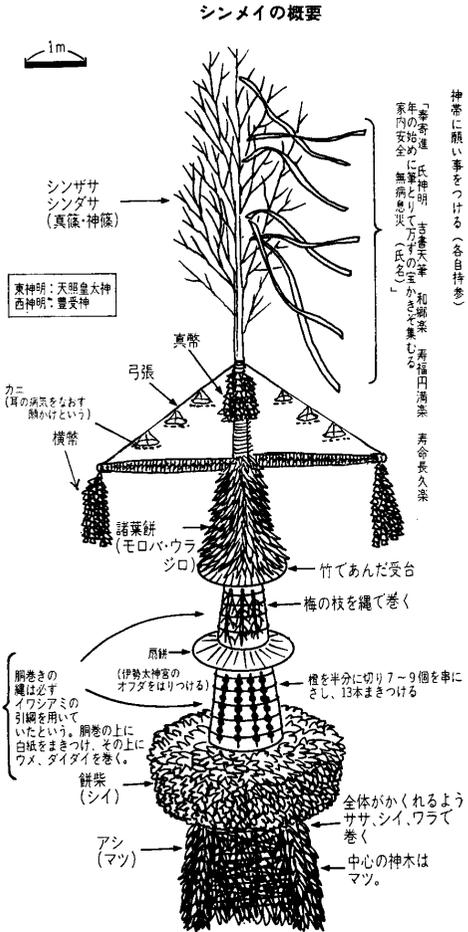
◇内容

(一)巻立て(祭り前の土・日曜日に神明を造る作業)

神明の構造は、松竹梅の縁起を基に、ダイダイ(橙)Ⅱ代々や御幣など子孫繁栄や厄除けの意味をこめたものとなっています。まず、黒松四本と心棒で脚を作り、神笹の竹三本と松とを一緒にして三か所を締め付けます。ついで下部に椎の枝でお椀形の餅柴(もちしば)を作り、中央部に大麻二〇枚を供えた扇餅、その下に橙の皮、上に梅の枝をつけます。さらに上部に、竹2本を横に渡し縄で隙間なく巻いた弓張、その下に裏白で諸葉餅を作ります。こうして長さ約二〇メートルの御神体が東西の砂浜に各一基、横向きの状態で完成します。

神事に願いをかける(念)自持参

「巻立て」は神明(左義長)と豊受大神(天照皇大神)を祀る神事。和歌山県新宮市阿月地区の砂浜に、天照皇大神宮(東神明宮)と豊受大神宮(西神明宮)を祀る。境内安全、無病息災(氏名)。



(二)起し立て(御神体を起し立てること)

早朝から身を清めて、白の鉢巻・白の肌着・白足袋を身につけた若者たちが、酒樽に棒をかけて担ぎ、特殊な足取りで通りを練り歩きます。これを「じょうげ」と言います。

「じょうげ」が神明宮の前に揃うと、法螺貝を合図に、神明の起し立てにかかります。二〇メートル余りの大鉾が、ハズ(張り綱)やカイゴ(はしご)に支えられ、浜をきってたちあがる光景は、祭事の中でも最も勇壮な景観です。起し立てが終わると、過去一年間に結婚した男子を海に投げ込む水祝いが行われます。

(三)長持じょうげ

花笠を飾った長持に棒を結んで三人が担ぎ、長持囃子というのを唄い囃しながら特殊な足取りで練る行事です。その前に一人、短冊をつけた笹竹をもって先頭に立ちます。

長持には古くは食物を入れて持ち歩くものとされていますので、各地区から神前に献進する御鏡餅、其の他の神饌を容れて運ぶ遺風と考えられます。

(四)神明踊り

神明踊りは、昼と夜御神体の下で、音頭・太鼓に合わせて御神幸の奉仕踊りを行うもので、男子は赤穂浪士や新撰組、柳生但馬守と十兵衛など槍や刀や菅笠を持って武者踊りをし、女子は傘や短刀を持って二人組みの踊りをします。また保育園児はボンデン踊り、小学生は花笠踊りや、ねずみ小僧と岡つ引きなどに扮した踊りなど、役柄も多く衣裳にも工夫がこらされています。

音頭歌詞としては、源平合戦の敦盛、熊谷直実、那須与一、大関記、忠臣蔵の義士討入りなどがあります。阿月神明祭に、神明踊りのあることは特色の一つです。

(五)はやし方(神明をはやす燃やすこと)

神明の前の霊代の鏡が撤去されて、昇神の式が済むと、総代によって神明に火がつけられ、たちまち火柱は火龍昇天の勢いで燃え上がり、餅柴はふきあがる風にあおられながら焼けて行きます。

人々は囃し言葉をたてながら張り綱をたぐりつつ神明を海側に倒します。

見物の人々は、まだ燃えさかる神明の飾りや、御幣などを我先に奪い合い、心木の松の木は抜き取られて長い火の敵が浜に横たわって、いつまでも燃え続けます。

最後に若者達によって「シャンノ、シャンノ、シャン」と三度の締打ちが行われ、神事は終わりを告げるのです。